

2021年横浜ナザレン教会・聖霊降臨節第十五主日(8/29)礼拝

「苦悩の中の祝福」

ルカ福音書第23章44節から第23章49節

【聖書】

ルカによる福音書 23:44 既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。45 太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言って息を引き取られた。47 百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言って、神を賛美した。48 見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。49 イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちとは遠くに立って、これらのことを見ていた。

1 十字架の力

私達は、8月に入ってからの日曜礼拝で、ずっとイエス・キリストが十字架に架けられる場面を見てきました。この四週間、「されこうべ」と言われるゴルゴダの丘の上に立てられた十字架のもとに私どもはとどまっています。どうしてこうも長くとどまるかという、イエス・キリストの十字架があまりにも豊だからです。そこで、どうしても見なければならないものがあるから。今日は、主イエスの最期を描いたテキストを通じて、新たな十字架の恵みに心開きたいと思います。

2 神の苦悩

イエス・キリストが十字架上で徹底的に苦しみ悩まれ最後を迎えられたのは、普通なら真昼の太陽が照り輝く筈の12時から3時。この時、全地は暗くなった、とルカ福音書は語ります。闇に沈む全地、それは、私たちの住む世界の真の姿のようです。苦しみと悩みに満ち、「こんな世界なのだ、神などいないのは明らかだ」と神を知らぬ人々が指さす世界。新型コロナウイルス感染爆発は、苦しみ悩む世界の真実の姿を私達の前に暴き出しました。私たちの造った世界は、何と多くの罪があり、何と多くの悩み苦しみがあることか、いちいち例を挙げるまでもありません。一人一人が神に対して、また隣人に対して罪を犯した結果としかいいようがない惨状です。そして、太陽輝く白日のもと、堂々と神の民が神を釘付けにし殺すイエス・キリストの十

十字架は、この罪の世界を象徴する出来事です。だからでしょうか、満月で迎える過越祭の備えの日、日食など起こりようのない時に、太陽は光を失い、辺りは闇に包まれました。

皆さんは、中風の男の話をお憶えているでしょうか。中風によって身動きできない男が知り合いの者達によって床についたまま、屋根の上から主イエスのもとへと吊り下げられた話です。あの時、主イエスは、中風の男に、何か同情めいた言葉は、一切語られませんでした。それどころか、先ず、彼自身の罪を思い起こさせる言葉をかけられました。「子よ、あなたの罪は赦された」。主は何故、真っ先に罪について語られたのでしょうか？

神がこの中風の男の罪に悩み苦しんでいたからだ、と言った方がいます。びっくりしましたが、イエス・キリストの十字架から思うと、神がこの男の罪に悩んでいたことは現実でしょう。勿論、中風の男だけではありません、神が、私たちすべてにおいて、私たちの不信仰において、私たちの心の頑なさにおいて、苦しみを指し示して下さるのです。地上のあらゆる苦悩は、この神の悩み、苦しみを指し示していると言ってもよいのではないのでしょうか。そして、天の御神は、私達の罪に深く関わろうとされます。イエス・キリストをその人を通して。ですから、どこで、天の御神が最も深く私達の罪と関わっておいでか？というところ、キリストの十字架の受難を通してです。十字架の主キリスト・イエスは、この地上のあらゆる苦悩、神の悩み苦しみを全くただお一人で担われた、このことを、福音書の受難記事は物語っています。だから、イエス・キリストの受難物語と無関係な人は一人もいません。

キリストの受難物語は、十字架への歩み、つまり、神に見捨てられた状態への歩みです。私たちは誰一人として、主のように神に見捨てられた経験はありません。私達が、命の造り主・神に見捨てられたなら、滅ぶしかないでしょう。しかし、それは、主イエスが歩まれなかったとしたら、やがて私たちが歩まねばならない歩みでした。キリストの十字架は、天と地の分裂です。地に住む人々が神と等しいお方を殺すのですから。しかし、天地を分裂させる十字架を神ご自身が立てられなかったとしても、私たち人間が立てていたでしょう。私たちが負わねばならぬ全ての事を、イエス・キリストが負ってくださった、これは真実だと思います。

主イエスの十字架の物語を聴くとき、私たちは、十字架上の主の惨たらしい姿に言葉を失います。ですが、それは自分の代わりに十字架についてくださった神の御子の姿。「なんとおいたわしい」と、私たちは嘆き涙を流し、主イエスに同情するかもしれない。しかし、実際は全く逆です。私たちが主イエスに同情するのではない、主イエスが罪人の私たちに同情して下さっているのです。主イエスの同情は、憐れみは、言葉だけのものではありません。

ん。主イエスは深く私たちに同情するあまり、低く低く、私達の罪の淵の底まで下りて来てくださり私たちの代わりに十字架に架かってくださった。

何故でしょうか？父なる御神が、私達への愛ゆえに、私たちにおいて、私たちの在り方や生き方において苦悩し尽くしたからです。そして、御子イエス・キリストを私たちの代わりに十字架に釘付けにしようと決心されたからです。この事に気づかされた時、私たちは自分自身の罪を認めることができます。そうして自分の苦悩から解き放たれます。不思議な事ですが、神の愛の内に自分の罪を認め十字架の御前に額づき悔い改めた時、天の御神は、この罪ある私を、罪あるあなたを、御子の命をお与えになるまでに愛し尽くしてくださっている、その愛が私達の心を満たすからです。

3 父よ、という呼びかけ

さて、共観福音書と言われる三つの福音書を読んでもすぐに分かるのですが、主イエスの最期の言葉はルカだけ違います。マタイによる福音書とマルコによる福音書の最後の言葉は、「わが神、わが神、何故私をお見捨てになったのか」という衝撃的な言葉です。一方、ルカは「父よ、私の霊を御手に委ねます」と大声で叫んだ、と語ります。マタイ・マルコ福音書では、共に、最後は言葉にならない大声で叫んだ、とありますから、この最後の大声の叫びを十字架の近くにいた者達が聞き取ったのが、ルカ福音書の言葉だと言う人もいます。確かに「わが神、わが神、何故私をお見捨てになったのか」「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」、一見、全く異なる二つの言葉です。しかし、二つの言葉の根幹には深い一致があるように思えます。

十字架の悶え苦しみの中で、最後まで天の御神を自分の神として、「わが神、わが神」と呼び求めた主イエスは、最後の最後の一息で、このお方を「父よ」と呼びました。そして、ご自身の最後の息を、ご自身全てをその御手へと差し出しました。事実、日本語では46節で「息を引き取られた」と訳されていますが、原語のギリシャ語の表現では逆で、息を「引き取る」のではなく、「息を出す、息を渡す」です。

主イエスは、最後の最後まで、父なる方に徹底的に従い通し、十字架の道を進んでゆかれました、一瞬たりとも、「この十字架刑は悪いユダヤ当局者とローマ軍のせいで自分に加えられている苦しみだ」とは考えられなかった。「もしも神が私に与えられないなら、父が私の上に置かれないなら、彼らは何もなしえない。この苦悩は、父が私に与えた杯なのだ」と主は知っておられた。私達は忘れてはいけません。46節の「父よ」という主の最後の呼び

かけは、この世のなにものとも比べようがない、比類なき苦しみ悩みのうちに呼びかけられています。十字架刑は悪魔を暗示させる、他に類を見ない苛烈で残虐な処刑方法です。十字架に架けられた者は、暑さにさいなまれ、渇きに悩む、体全体は、十字架に架けられる前に釘付きの鞭で打たれて傷だらけ。その傷は炎症を起こします。体の硬直や痙攣が起こるのが一般的でした。徐々に息が苦しくなります。肺が体の重みで潰される、呼吸困難に陥ります。しかし、すぐには死ぬこともできません。彼らは釘づけられて死の不安に悩み続けます。それは、あらゆる苦痛よりも恐るべきものだったでしょう。死はいつ訪れるかを知らないからです。ただ苦しみ呻きつつ、のたうつ事もゆるされない、そのような時間が際限もなく続きます。

人として打ち砕かれ、いたぶり殺され続けている者が、自分を打ち砕き、絶望的な死に至らしめる者の意志を完全に理解し、心からそれに同意し、「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」と祈り、自分の最後の息をその手に委ねるとは。とても、私たちにはできないことです。そう、私たちには祈れません、

しかし、だからこそ、十字架の我らの主イエス・キリストが私たち全てに代わって、父なる御神に呼びかけてくださったのです。そう、キリストの言われたこの「父よ！」という呼びかけには、この世界の全ての悩みや苦しみを戦争を、暴力を、疫病を、不和を、分裂を、父なる神に訴える呼びかけです。私たちの心を耐えがたくかき乱す様々な問題、私達が怯え恐れる不安、私たちから生きる気力を奪ってしまうような罪の社会を、それらが生み出すあらゆる悩み苦しみを、父なる神に訴える叫びです。主イエスは私たちに代わってここで叫んでおられます。2021年の世界を生きる私たちの生活の中にあるあらゆる問題を父なる神に告げようと、「父よ」と主イエスは叫び呼びかけられます。それは、何のためか？何の為に主は「父よ」と叫ばれたのか？

私達がここで、この世界で、人の罪による苦悩を真実に乗り越える為です。確かに私達は自分の力では、「父よ」と呼ぶことはできません。しかし、私達に与えられている御子の霊、聖霊が、十字架の主イエスの声に合わせて、「父よ」と呼びかける事ができるように助けてくださるのです。最初にイエス・キリストが十字架の上で「父よ」と叫んでくださらなかったら、私達は誰も人生の苦悩を本当に克服することはできないでしょう。それぞれの苦悩から逃亡することはできるかもしれませんが、しかし、苦悩の中で神の力に与えることはできません。私たちが主と共に「父よ！」と叫ぶことなく、ただ苦悩から逃亡した時、より一層惨めな自分になっている事に気づく、罪の縄目に深く縛られている事に気づくでしょう。一方、主イエスと共に「父よ」と

いう叫びをあげる時、どんなにキツイ罪の縄目であっても解き放たれる事を私たちは知るので。

この事を表しているのが、神殿の幕が真ん中から裂けた出来事です。この幕は、エルサレム神殿の至聖所を区切る幕であり、神と人を隔てる壁の譬えだと言われています。私たちは、自分が神になろうと、真の神を不倶戴天の仇と見なし、共に生きることが出来なかった者達、神と私達の間には敵意という壁があり、とても、天の御神を「父よ」と呼べる者ではありませんでした。しかし、主イエスが私たちの代わりに十字架の上で「父よ」と叫んでくださったからこそ、父なる神の御許への道が開かれたのです。祝福への道、命への道が開かれました。

ですから、この「父よ」という呼びかけこそ、主イエスが開いてくださった神への入り口です。私たちは、主イエスと共に「父よ」と呼びかける事を通して、苦悩の中にあっても神の祝福を受けることができます、神の豊かな命に与ることができます。私たちの人生のよいものも悪いものも、一切のものを、父なる神のみ手からのものとして受ける、苦悩の内にあっても、私たちの為にしっかりと保たれている神の祝福を、神の命の力を受け取る。神の祝福の内にあつてこそ、私達には為すべき最善のこと、目指すべき目標が示され、そこに向かって立ち上がる力が与えられます。

4 主と共に祈る

この「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」という祈りは、先ほど、共に読み交わした詩篇第31編の6節の言葉だと言われています。これは、最も美しい詩篇のひとつであり、「義人、正しい人が神を呼ぶ詩篇」のひとつだと言われています。不思議なことですが、主イエスは、最後の祈りをご自分の言葉で祈られませんでした。主は、当時、全てのユダヤ人が知っていた祈り、一節を聴けば、誰にも思い浮かんでくる祈りを選ばれました。無数の人が、主の前にも、既に自分の人生の危機に際して祈って来た詩篇です。このように、主イエスは私たちの祈りに関わってくださいます。もしも、私たちが今、私たちの苦悩のために、他人の悩みのために父なる神に祈るならば、イエス・キリストは私たちの祈りに深く関わっておられるのだと知ることができます。私たちは、ただの一人も、見捨てられた者ではないのです。主イエスが私たちと共に同じ言葉で祈っておられ、私たちの苦悩の中にすっかり入ってきてくださるから。

だから、祈る時に、全く新しいことが起こります。主イエスは、私たちの苦悩の中で、私達と共に祈られる事により、文字通り、わたしたちの祈りを

神の前に携え行かれます。主イエスの名により、またイエスのみ名を呼び求めることによって祈られる祈りは、力つきて地に落ちてしまうことはありません。主イエスなしには、私たちの祈りは雲を通り抜けることもできず、どこかで蒸発してしまう、無気力な溜息にも似たものとなるでしょう。しかし、イエス・キリストが祈っておられるので、今はどんな祈りも聞かれないままにしている事はないと、私たちは確信できます。

だから、「父よ、私の霊を御手にゆだねます」という主イエスの祈りを聴く皆さんに私は勧めます。「イエスが父に全て委ねたように、あなたのあらゆる問題をイエスに委ねるように。あなたの病める肉体を彼に委ねるように、あなたが非常に傷ついていると思っているあなたの魂のこと、あなたの子供たちのこと、あなたの無意味に過ごした年月のこと、あなたの失敗した職業のこと、あなたの失敗した結婚のこと、あなたが悪い父であり、悪い母であること、あなたがしょい込んだ重荷、あなたの困窮を、あなたの憎しみを、あなたの悲しみを、あなたの喜びを、あなたの無関心を、あなたの不安を、全て主イエスに委ねるように、と。父よ、私たちはイエス・キリストの名において、すべてを御手にゆだねます、こう祈ることこそ、苦悩の中であって、神の祝福に満たされる事、神の命に与ることに他なりません。

5 新しい教会

この苦難の中の神の祝福を私たちに示す為に、受難物語は、特に美しいエピソードによって終わります。ゴルゴダの丘の三本の十字架として姿を現わした教会、その真ん中には、「父よ、私の霊を御手に委ねます」というイエス・キリストがおられました。そして、最後の息を吐かれた時、その時、主イエスの十字架のもとには、既に新しい教会を継ぐ者達が姿を現わしていたのです。人の目には見えない形で。

確かに、教会の主イエスは地上の生活から取り去られました。主は殺されてしまいました。ヨハネ福音書にある通り、「彼の民は彼を受け入れなかった」(ヨハネ1:11)。総督ピラトは、ナザレ人イエスにまつわるゴタゴタはかたがついた、と考えていたでしょう。祭司長たちは、今や厄介な人物はいなくなった、取り除かれた、とほっとしていました。ユダヤ当局もローマ軍も、イエスの弟子たちを逮捕しません。指導者が死んでしまえば、残りの者はみな散らされ、やがて忘れ去られてしまうだろう、と考えていたからです。

しかし、その時、十字架の下には、既に新しい教会を受け継ぐ者達が登場していたのです。教会はまだ自分自身を知りません。なすべき事を少しも知

りません。痛みと失望と悲しみとは、彼らの心を引き裂いています。けれども、彼らは、主イエスの十字架のもとにいるのです。

主イエスを知る人々は、初め恐れて散らされていたのですが、再び十字架の回りに遠巻きに集まっていました。ガリラヤからイエスに従ってきていた女たちもいます。そうして彼らは主イエスの十字架の証人となりました。更には、ユダヤの民衆の一部は、主イエスの十字架を見て胸を打った、と言われます。後に、使徒達の言葉がその心を貫き、神の御許に立ち返らせることとなる人々です。

そして最後に私たちすべての代表者、神の民イスラエルではない異邦人の代表者として、百人隊長がイエスの味方につきます。後の伝説によれば、彼の名前はロンギヌスであり、洗礼を受けてキリスト者となり、教会でよい働きをなしたそうです。彼は、この十字架で殺された人は「正しい人」であった、罪人でも、罪人の側に属する者でもなく、神の側に属する者であった、と宣言する最初の人となります。ですから、この百人隊長は、十字架に向かい巡礼した無数の異邦人の民の流れの先頭に立つ者です。

その巡礼の民の真ん中に、私達、横浜ナザレン教会もいます。私たちの教会はこの十字架のもとに誕生した新たな教会に加わります。その結果、私たちの教会にも新たな可能性、つまり、最も深い苦悩のなかで「父よ」と叫びつつ、あらゆる苦悩を担い克服する可能性が開かれたのです。主イエスが共に担ってくださるから。しかし、私たちの教会が、その言葉と行いで、主の十字架の下に立とうとしないなら、またこの主イエスをキリストだと告白しようとするなら、この世の苦悩を真に担い且つ克服することなど不可能になります。ですから私たちは、この方、十字架につけられた主イエスに祈ります。「主イエス・キリスト、われらの傍らにいてください。我らは、この世界とその悩み、また我らの命とその悩みをあなたの御手に委ねます」と。
アーメン